月刊 オリーブ
2023 4
Vol.95
— 真の更生を目指して —

生きる

黒澤明監督の不朽の名作「生きる」が今、『生きる LIVING』（イギリス映画）として話題となっています。

［仕事一筋で空虚で無意味な毎日を送る中、余命幾ばくもないことを宣告された主人公は、それまでの自分の人生を振り返り「生きる事なく人生を終わりたくない」と静かに、しかし心の中は懸命に熱く生きる事を選ぶと言った物語です。］

このストーリーは理解できても、さて私も…と、我が人生に置き換える事ができるかと言うと、なかなか難しいのが現実です。殆どの人が今「生きる」延長線で「死」を迎える事になるからです。

死生観とは文字通り今回のテーマの「死」と「生」についての考え方の事。死は誰にでもいつか必ず訪れるという前提で、どのように生きるかを考える事です。

この死生観は信仰している宗教に影響される事が多いと言われます。私達クリスチャンとノンクリスチャンを比較すると、死に対する考え方に大きな違いがある事に気付きます。こう書いてあるからです。

ヨハネの福音書　3章16節
16）神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

永遠の命を持つクリスチャンにとっては「死」は通過点でしかありません。この例えが良いか分かりませんが死刑囚について書いてみます。彼らは大罪を犯したことで死刑の判決が言い渡されました。施設の中では、本人が希望する宗教を選択する事ができます。死刑執行までは各教誨師が死刑囚のメンタルに向き合いますが、「死」を他人事としてでは無く限りなく自分事として日々向き合っている人たちですから、それは真剣です。施設でクリスチャンとなった方の死刑執行を迎える姿は何とも平穏だと伺いました。次の聖書箇所が支えになっているのだと思います。

イエス様と二人の犯罪人が共に十字架にかけられた聖書箇所です。一人はイエス様を罵りましたが、もう一人はその場で信仰告白をしました。

ルカの福音書　23章41～43節
41）おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」
42）そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」
43）イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

ハーベスト・タイムの集会の一つに「カレブ会」があります。人生経験豊富な70歳以上の男子の方が対象で現在10数名が参加されています。私もその一人ですが、先日の集まりでは大学教授の方がＡＩに関して皆さんにレクチャーして下さいました。70歳以上とはいえ皆さんまだまだバリバリの現役です。この年齢になると「死」を自分事として受け止める事ができます。

日頃の生活の中で何が起きるか分からない今の時期でも、「主に委ね」より良い生き方をされている「カレブ会」の皆さんと接する時、75歳の私も「主にあって」熱く生きなければと強く感じています。

オリーブの家
施設長
青木康正

ファミリーの声

受洗を終えて

私は刑務所の中で聖書を読み、イエス様と出会い、聖書に書かれていることが全て真実である事を知りました。

出所後オリーブの家で聖書の学びを行う青木塾に参加し、6か月間の学びを通して福音の三要素、キリストが［①私たちの罪のために死なれたこと　②墓に葬られたこと　③三日目によみがえられたこと］を信じ、クリスチャンとなり受洗する事ができました。この洗礼式を忙しい中、準備をしてくださったオリーブの家のスタッフの方々に感謝しています。これからの人生、様々な試練にぶつかると思いますが、何が試練なのかをしっかりと自分自身で見極め、神様に祈りながら神様が定めた私の道を歩んで参ります。（S・Kさん）

信仰を持つ前の私は自身の心の病いにも気づかず、孤立し社会に背を向け犯罪を繰り返していました。オリーブの家にお世話になり、青木施設長からの聖書の学びに誘われ、聖書に書いてある事実に触れる度に、福音の三要素が私の心の支えになっています。私は何かする前に必ず神様に祈り、心の平安が得られる答えを受け取る事が出来ています。この先は信仰を堅く守り、罪に堕ちる事なく生きていけます。ありがとうございます。（Y・Rさん）

私は令和2年4月にオリーブの家にお世話になる事になりました。最初はイライラして気持ちが落ち着かず、先生方に随分ご迷惑をおかけしました。それは今、間違っていることに気づかされました。

福音の三要素を信じ私は救われました。86年生かされているのは神様のおかげであること。神様は必ず私を助けてくださることを信じます。神様に感謝、感謝です。（O・Kさん）

塀の中からの便り

毎月送っていただける月刊オリーブ、ハーベスト・タイム、ありがとうございます。

1月号に書かれていました。「8章人間に変えられた私たちには誰も敵対出来ない…今年は8章人間となって地に足を着けしっかり歩んで一年を乗り切ろう！」という青木さんからのメッセージに気づきを与えられました。その後、ローマ人への手紙を何度か読み返し、7章までと8章からのことを自分なりに考えました。そこで理解できた事は律法に死ぬと言うこと、そこを通らずにして救い（聖化）を得られる事はできないのではないかと言うことです。律法に死に、キリストに生きるとは…クリスチャンであるならば、信仰によって義とされる事は知っています。

すなわち、悔い改めによることです。私も過去の自分を悔い改めることで救いを得ることができました。律法に死にキリストに生きる…言葉では簡単に理解できそうなことですが、そもそも私にとっての律法とは何なのか…。クリスチャンになる前の私は、宗教的価値観（どんなものであれ）も皆無で、そう言う部分では無秩序の中で生きてきました。そこで律法とは何なのか、何度も聖書を読み返し「自分自身が自分に対する律法」（ローマ2：14）そうか私そのものが律法なのかと…。

私は今まで善悪の区別がつく人間だったわけですし、世の中の罪というものがどう言ったものなのか、又、その罪を犯せばどうなるか分かっていた人間でした。であるのに、私は大罪を犯してしまったのです。まさしくパウロが書かれているようになったのです。（I・Aさん）

塀の中と私との（心と心の）キャッチボールは続きます。私も励みを受けています。

青木康正

刑務所の中で「月刊オリーブ」を読んでおられる皆さんへ

オリーブの家では、手紙ミニストリーズ「ノアの箱舟」活動を行っています。出所後、自立準備ホーム「オリーブの家」で学び真剣に社会復帰をしたいと考えておられる方、是非、文通を始めませんか？お待ちしております。

支援者からの寄稿

被害者側と加害者側
― 癒し、赦し、和解

今井　洋子

15・人知を超えたキリストの愛を知る?!

2003年秋から、『弟を殺した彼と、僕。』の執筆と並行して、私は週に一度、教会で「マルコによる福音書」を読んでいきました。授業料を尋ねると「礼拝で思った額を献金してください」と言われたので礼拝にも毎週出るようになりました。礼拝では毎回「今日イエス様を信じる人は手を挙げてください」と牧師が言います。私以外は皆信者だと知っているのでシラけて手を挙げる気になりませんでした。とはいえ、その頃、びっくりすることがよくあったのは前回書いた通りです。

「マルコ」の学びで並行個所を参照した時です。「雀の一羽でさえ、あなたがたの父の許しなしに地に落ちることはありません」という「マタイ」の一説がありました。私は、「雀なんて毎日のように見ているけど、自分の目でも、読んだものや人の話でも、雀が地面に落ちるなんて、聞いたこともない。聖書は、なんと下手なたとえをするのだろう」と、内心、聖書を見下しました。ですが目の前の牧師夫人には黙っていました。ところがその午後、小学校3年生の息子が帰るなり玄関先で「お母さん、これ、落ちてた!」と、雀ほどの鳥を手のひらに乗せて見せました。私は「やられた!」と思いました。今、その「やられた!」を言語化してみると「神はいる。神は私の心を見透かしている。そして私が間違うと、やんわり諭す」といったところでしょうか。私が、聖書に書かれていることと自分の経験や常識とが違っていた場合、聖書をとる、ということを受け容れた瞬間です。世間的には荒唐無稽で、私が他人に合理的説明ができなくても、私個人は、聖書の記述を受け容れないことがなくなりました。

聖書を学びに教会に行ったある日。たまたま来ていた信徒のMさんに教会に来た理由を尋ねられます。話すと「え? 私、長谷川さんのこと祈ってきました!」と言うではありませんか。ご主人が付けていたテレビの報道番組で長谷川死刑囚の特集があり、なぜか強く「祈りたい」と思い、面識もないのに祈ってきたと言うのです。死刑になった事も、帰省中の尾道で目にした小さな新聞記事で知ったそうです。長谷川さんの死を知ってがっかりした彼女は「この死を通してイエス様に出逢う方が起こされますように」と祈りを変えたそうです。それから2年。Mさんの通う小さな教会の近所に名古屋から私が引っ越してきたのです。Mさんも私も、びっくり仰天でした。

こうして私は、人間の集団としてのみの教会や、人間に過ぎない牧師や神父の指示を超えて、神そのものが存在し、私を愛し、導くことを、聖書の中身に照らしながら徐々に、知っていったと思います。

今井　洋子
いまい・ようこ

1966年金沢市生まれ。東大学文学部卒。信託銀行勤務、専業主婦を経て、子どもを教える仕事をしながら、ノンフィクションを書いている。2004年受洗。2017年ハーベスト聖書塾修了。2018年よりNPO法人「オリーブの家」理事。
前川ヨウの名前で、原田正治著『弟を殺した彼と、僕。』(2004年、ポプラ社)を構成者として執筆。雑誌「東京人」2011年3月号に「二・二六事件1被害者の娘と加害者の弟の物語」、2016年8、9、10月号に「二・二六事件ある青年将校の弟」を寄稿。

オリーブの家で見つけた笑顔

3／16 新しい車がやってきました！

今までのハイエースに代わって、10人乗りのフロントに車いすのステッカーが貼ってある福祉車両が来ました。この車の走行距離も今まで使っていた車の半分以下です。このような車が与えられて驚いています。いえ、私たちの見えない所で神の采配があっているのです。オリーブの家のグループホームには車いすの方がおられますので願ってもない車でした。これから、何かある時には、緊急避難車両として私たちを守り助けてくれることでしょう。

理事長 小原順子

全国のオリーブの家をご支援くださる皆様へ

さわやかな春の香りを心地よく感じる季節になりました。このたび受洗されたオリーブの家のファミリー3名の方々は、目を輝かせて生きる意欲に満ち溢れており、神様の恵みは確実に降り注いでいます。いつか訪れる「死」を意識すればするほど、この瞬間に生かされていることに喜びと感謝の思いを感じずにはいられません。今後ともお祈りとご支援をどうぞ宜しくお願い致します。

理事 井博司

2022年12月～2023年２月会計報告

		12月	1月	2月
月次自立準備支援人数		4名／7室	4名／7室	4名／7室
グループホーム利用者数		8名／8室	8名／8室	8名／8室
累計ファミリー数		147名	148名	148名
先月より繰越		4,423,710	4,854,085	5,351,808
収入	自立準備ホーム	689,634	660,236	700,336
	献金	1,291,334	746,000	956,660
	グループホーム	2,105,455	2,498,887	2,124,279
	その他	239,775	1,238,429	212,756
収入合計		4,326,198	5,143,552	3,994,031
支出	家賃	621,350	585,350	585,350
	水道光熱費	191,802	305,288	246,855
	食費	475,711	175,269	723,502
	人件費	2,011,892	2,918,132	2,063,605
	活動費	88,479	151,854	226,122
	その他経費	456,589	459,936	407,083
	施設準備積立金	50,000	50,000	50,000
支出合計		3,895,823	4,645,829	4,302,517
収支合計		430,375	497,723	-308,486
施設準備積立金より取崩		0	0	0
翌月繰越現金預金		4,854,085	5,351,808	5,043,322

2/28時点：施設準備積立金残　3,150,067円

※　食事関連費には、11-12月分の給食宅配代金 540,490円、その他経費には、車検代196,900円が含まれています。

銀行振込

肥後銀行（銀行コード：**0182**）
京町支店（支店コード：**156**）
口座番号：（普通）**1574408**
口座名義：NPO法人オリーブの家
トクヒ）オリーブノイエ

郵便振替

銀行名：ゆうちょ銀行（金融機関コード：**990**）
口座番号：**17180-5444801**
口座名称（漢字）：NPO法人オリーブの家
口座名称（カナ）：トクヒ）オリーブノイエ
（他銀行からお振込の場合は）
店名：七一八（読み：ナナイチハチ）
店番：**718**
口座番号：（普通）**0544480**

月刊オリーブ
2023年４月１日発行
(毎月1回発行)　第95号

編集・発行　ＮＰＯ法人「オリーブの家」
〒860-0082　熊本県熊本市西区池田２丁目９番１号コーポ池田201
TEL 096-342-4123 FAX 096-342-4248 E-mail 0110harvest@gmail.com
http://seishoforum.net/olive-house/about/